俳諧密談集

中村俊定文庫
文庫 18
744

紅葉山文庫

俳諧とゝいふ和哥は一船より出て俳諧
平流より振を生て調ふるゝ所に貞徳と
頃ゝはとゝふやゝ柳髪の生木実て
東武八未詩徳元の行とゝんゝも雪柱君を和
かゝと迷とつけかゝ蛍ゝ霞ゝもゝ伽よ
炭火代と点を西調和八蛍ゝひく白よ女
まゝ川の子日代とのいやゝゝ又浜徳八水と羽と
合ゝ行粉や久涼かゝこの陀屋ゝ中小蒸ゝ
の其角尚雪ゝて名ゝ子ゝゝも俳ハゝゝ点
風義と化ゝまゝゝ名月や柳の粉と空へ吹

内閣文庫

[illegible]肉の如く元の行を[illegible]行て
訪しかく[illegible]いく行よ蕉門の[illegible]い横へ[illegible]り
[illegible]を田畔よ生死も知[illegible]み白風と[illegible]皆
東の風い[illegible]に元猪と[illegible]て俳諧と
[illegible]く人[illegible]行[illegible]の猪[illegible]
小蓑[illegible]く[illegible]
[illegible]の[illegible]と日[illegible]の
[illegible]
猪喜化して淋しき秋のゆふ[illegible]村[illegible]
小猪りふこと山[illegible]る月[illegible]
[illegible]の猪よ俳諧の[illegible]不實のたの[illegible]

天地鬼神不感通乃[illegible]とよくわ[illegible]

享保十六辛亥年[illegible]の付

七名八雅大意

[illegible]詩[illegible]連俳門[illegible]立[illegible]猪と[illegible]一梅[illegible]
[illegible]門[illegible]分[illegible]車と[illegible]
連[illegible]俳諧つ[illegible]中[illegible]以下[illegible]猪
[illegible]上雲上[illegible]下[illegible]
[illegible]
倫の[illegible]生[illegible]ある事[illegible]自由自
左を働く[illegible]俳諧の一門よ[illegible]

所詩句の姿より古体に俗体平体の元あり
しかして姿句附合といふもたふるがし
相違あり新たいかゝして古姿より新古有
事と思ふや付合といふも句の姿なよ
かゝ八事のこゝろいく付合の不可もめ
古体を逃さるよく元合せ〻おそし術く
付合ゝ一座の伺を句体而白とゝ
去へゝ京花も七情の上も人倫の交りも
只此俗語より有ゝ云ゝ学ゝ

訳義

一情句ハ和句連歌ハ〻執向ハ先を俗体
俗体平体の上と去る事
但世上の俗語ハ句俗体ハし平体ハ連歌ハ同
去ハ俗語の一門と云ハ又さいもと
句を用るハ有ゝ俗体と俗語と云ハ共連歌より俗語を入ゝ
一姿句付合ハ情句ハ古くとも姿ハ新しき
と去ゝと思ふゝ
但先執向と求るに姿と先より業ゝ出し
丈より情を平ゝこゝろの同体よ心むふ
去句の句ハ抽体と白ハ〻何ハと
先ゝしき執白句ハし姿ハ付ハ情斗

あるいは句まわるめと人を立合ましく〳〵たとえば如く
はなをはおのづから梁の上もまた〳〵ちかづきて
風情よりあるまじき事にあり
一付合といふは四句の運ひ三句の付
寄句の寄れ場所を思ふ〳〵寄句に寄を
飾り詞寄詞より寄りて事方を〳〵さるべき
但句の面白きといふは寄句の付不二句の
運ひよくのるを主情より相ひと叶ふる句を
こそ秀吟とそいふべきなり
一巻中の月花ハ風流当一あるべしよく〳〵

心得付べきこと
但当月恋を主〳〵和歌の体より似さるべ
しまた氣をつけ情ハ実あるべし意句梁ハ俗
談平語を心得専〳〵性花といふを称のこと
さらに外芸〳〵行のまてもを花より奇を出る
こと肝要なりとそいふ襲英の句とえらん
ハ中原幸老〳〵月七夕をあく情きり
さる十六夜の京を月をいわれされを
こそ兼好の隈かきとのこそるものかいと
いふ月ハ花りしとも迷ふとそいふ

風雅辨

蕉翁公武の事

一蕉翁の公武執中の法として姫中納言の門姫路
を翁伝中を初め魂を包む傳文を訳八十論
変化の新しく妙なる
まゝ湯や栗をとゝ小苔の色　巴静
此句栗の初めと続き中句平句ハ姫中納言
あゝ口とゝる利にとゝ不ゝ初ゝ
句中まこゝ蕉翁小為るゝ此不蕉翁の
句の栗一ゝまりゝ大もゝをいゝ此執中

とゝふるゝ句伝の時の句伝の始白ゝ先世を
始て生ゝ蕉ゝ一字ゝ蕉ゝ栗ゝ
生ゝを箱ゝ入ゝ借ゝ巻の栗の上ゝ高ゝ
吏ゝ栗ゝ出ゝ生ゝ高ゝと命ゝ
高ゝも汚ゝも名所ゝも只方ゝ不毎風毎
雪ゝ書ゝ新風情ゝ
句伝ゝ俳ゝ栗中に
牛一ゝ小ゝ栗ゝ只ゝ
ゝ古ゝ執白ゝ小ゝ
ゝ伝ゝ考ゝ人倫居所ゝ
かゝて初ゝ生ゝ付ゝ句伝ゝ高乃

一世もさまくに分るとなく世間の事を
合点せる者〳〵詩い歌詞ハ不を持て歌うに
小てい さりとく歌向ハ求めとも右の一字歌のこと記
歌向ハ歌うるものゝ そこの歌向の立ヲ方ハ右の仮名て働く
不立更せる者〳〵 物句他の世ヲ仮名てい 枕中の法
居るこゝの上姿かけ合 当一人姿の事ハ十論姿
情の論小要〳〵 平意句他ハ姿をもて〳〵
情ハ詩ふるとハ物へ〳〵 又かけ合ふハ歌句
句 表柳の泥ヲ表ふ 沒て小表柳
の表合を名人の他ハ右〳〵 新歌と

いへもそうハ新〳〵きあいハ 泥ハむるいハ〳〵
絵のハ 初ハ歌ハ人ヲ 山ハて面白きあと絵合せる
ハ〳〵 歌の句一句もかけ合のあきハ〳〵 を上
小て 詞ぐハ〳〵こゝ面を言事とかけて 六九和ハ
歌ハ表ハ〳〵 表風ハ 詞出ふ 詞き 物きくハ 物ハ
詞く 歌ハ多物ハ 表を 詞〳〵 決定の上小て
小歌ふを改め句他ハ物ハ 世不 能〳〵 考〳〵
一 表句〳〵 発句ハ十ハの 姿ハ〳〵 服ハ 世ハの
物ひふく 世三ハ七ハの 位と 言ハ〳〵 て歌ふ
歌 姿句 句ハ 歌の新 いつも 平句 を 表れ

仏修ナシ

筆をわるくせんとの症ありて市三よりの位わるい
行を留りと語せんや市三款字をめのるが又龍方に
あれかへとい心くも発句眼をもに よりをふて ことま
らい市三字をめと制せんや字をめをたるほよ

風姿の事

一俳諧い俗語平語よりて句ふわるくもいへて俗言ゆ
の事とありぬ言葉とつづくさかるの数に
歳くをと位るといふくを俗言不野人のよう
みるとやくしをよりあるべき也を俳諧と
いつれ俗とはけるまい句言の文と又句ひ

て今ものをいかのれと風流い生ぬる事を俳諧ふ
やくき句句と俗言ふ云かへるといふわるに俗
言とやくしに源ふ言のみるを人ゆ今 あれとも
句句とおいてやくくまるたわるい言ふきひと
俳諧の句ものをかへ 文の体と
いつるのいたくい拳白集の問 事小句と真とく
ひさこ宝しかるのむるい小句ゆ生きう
こくしかをみる文面白しい下ゆの句ゆ俗句俗利
ふくくいを生たのしむるくまを文をくいわはく
風言の門かくくはまるたる不みるをは水をためて

泥めるよさそう海こと かいつてこゝろ和ゝ まさやうに
ゆしそうこうてんくさいかちゆるゝ うそ川 三ッ口ッ
二ッ三ッ一ッ ゆと形さ出 ゝもちう少ゝ けゆ四ゝ
ゝ社陸 三ッ口ッ二ッ三ッ一ッゝの み情 四位の不入 ゝき
ゆきの不数さゝ四ゝ 泥ゝ 明ゝ字の 迫く けゆ ゝ
さ毎 結ゝ ゝよ ゆき ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
子 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
味へ ゝ

分合の事

一 分合ハ先ヒ人匂の選ひ四ゝの指物 ゆ 鉄の氣味

人合毎第匂ゝ ゝ ゝ ゝ 考へ 古 箱の ゝ 和ゆ 分合ハ
耳ゆ少ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 初 ゝ
第匂の姿 ゝ ゝ ゝ ゝ 事方の事 ゝ 方匂 ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ 古分 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
匂の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
毎分合の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
七名分方小八鉄 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
考へハ分不 迫 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
乗る陽 ゝ ゝ ゝ 有心鉄 舎 釈 迫匂 ゝ ゝ ゝ

海松〳〵とそこ〳〵なる句のむつ〳〵こと句の
塔〳〵等なる句にて七名八拍とかく〳〵働く〳〵したる句
医者の考のごとく〳〵句に脇とあれ句とも句に
深沉遅緩〳〵とそこ〳〵なる句と句に因果こと脇乱むり
つき付ハ趣文鞋の脇とも窟ひ業とそこるる
あれハけだし引合考〳〵そこ句とゆて業方より
元句り付ハ打こ〳〵句の姿と考へ句句れ仏香
ものへ〳〵たり〳〵ハ情分句句こと姿とこそ情ハ
結とそこ〳〵るのこと句の姿句仏の活ハ味
まく〳〵句仏とゆふハ句句に信ふて句句のつかさ示

けり句仏よりこと句句ハ句の哭と離れて業句の
外ハ姿とこそ〳〵句仏ハ句れ用とゆて句
句の門の情と結ひ〳〵るの数と書こそ〳〵大
こハ句句斗ハこ句仏の句句〳〵結ひ示ハ
こんまれ句れ哭も外句も出来こ自句れ
結ひ一句の立こハ句句とよくさかハいこも
句句き句句ハ出来ハこ必句句とこそハこ永句
斗の結こと句りこ〳〵ハ一元一連芭尾ハ
き示句斗の仏こ句ハこ七名八拍とゆふも
句句仏の句句と考へこと一句の八拍か

きふ如と云へり句葉の法は所之但要加之
古今抄 牛合句法 熟得可へし

先前句の葉と云と云へ共 沈小牛句の乳母と
こくと云こく 其上牛句の姿と云つき
和句似て秀句のかくこゝに仕つけ
沈小句葉の書ら詩歌の拍子に句牛
喜上ふて吹し放て 其物の句を
やすらかは牛ぬ句いかゝきもの

案方七名

有心躰 一字一字ふかくとゝのゝて句の姿と云に句小
りの姿を用ゆる

大名ゐれと茶ハおトを行
高人ハ扶しさ門ふかしこ所も
向附 人情之句へ付之句は之句の人とゆ一ふ句の人小
対しるゝ人情をこひあしを付の句
蒼窮と吹のゝふいさまして
大名ゐれと茶ハ蔵ゐ数たゝ
麦飯よ門さを住ゐ老の寂
起情 凡京之句川渡之句牛之句に人情をとりらいて句の
情と牛ぬたゝ凡京のゝ所のゝ句
一ゝ句の通ゝ日の氣
五六年 田中の雲はゝちこゝ

京ハ瓶ふてうさ[illegible]

會釈　おうらのむけうさけ京ハ物ハ通ス青色ハて
ケ[illegible]ハ[illegible]ふ

逃句　おうらの時しへ人ハかうけ代ヲ[illegible]ハけ
ハ前ふて[illegible]

柏子　一ヒの[illegible]ヒと京ハ柏子ハみてちゝ[illegible]

桟俵の二ツ[illegible]ハ　三ツ巴

赤子ハ[illegible]の[illegible]ん[illegible]

色立ハと[illegible]

伊勢の山と田のふんと

桃太の頃ハ通ス沈乃音

又ハ書ニ

ハと[illegible]桃灯[illegible]

沈[illegible]ハ[illegible]

分方八解

○きゝ深世の入ると学　[illegible]

真人　ほゝとゝ[illegible]の角ニ居ル

真情　湯の雪の簑ハ通キ　芥子の花

天相　[illegible]ハ[illegible]ふ雲[illegible]

時節　門雪の雪も[illegible]ふ○[illegible]

時宜　八月の[illegible]

俳　車大

梅の咲きそめ俳の姿しくて

物語　八百し恨す浮世と云ちいし

祝　節解ぬ多寿の根延るかな

時分　初夕の時くらく湯ちけ夕の数

觀相　凡永人相の教こと　ちとくの教　うしみの夕の教あり

負外こ

空撓　口傳

障子ニ新月の影ちらしたく

賀とのいでれると老の目を拭ひ

對附　口傳

高の切者小家代掛ヒ

釈の位牌し寺の表こセ

前夕取様の事

一或巻心　けの鶴い青鳴とふ舞うあり

此外合皆〳〵青のるもと楽〳〵吉凶の二ツ小乙凶

敬あり　ニ俗情小〳〵凡物小あり〳〵青写小

青の敬凶〳〵乙とし鳴ともこ云あり　ニ家夕乃

実小青ふ死夕あり〳〵家小家夕の姿と乙凶

て留文の按按と敬凶と外〳〵小

男女楫とと小阿桑さよ

是後の風情人は会い所なりける既のもてなしの長
吐延屋かうらうの名をとゝめて八幡の鶏しいまゝ
雪ふるゝおの鶏を雪踏の嬉しがるを接ぶ
外合句

一前句の元句をいゝ捨れたるをもてなしを加て立を小前句より
考へしに所ふ詞句をおもて
恨をうらもいうぬ貧乏をうたふ
徒元句
隣よい鶏も鶏も呼こまれて
行き上句
いりてもいつ紙元はやむ衆

正句　天窓をは九めたるかゝたき証
太鼓鐘の外合い芳句の貧乏をいうまふ
て人の元食をうらやむ人を極句をうたふ
ゐ〳〵を俗情をふくきをうゝ又句俗情
一句を活ゝ上をとゝれ八月の十帝の句に和く
芳我を活して句俗狂を迷をわりま
風をうく俗て貧乏をいりし活をの鶏を外と
俗諧ふゝして一句の活をとゝ如不毋不祇言
ゐすゝを夫は活をゝれ俗諧をゝさるなを共貧乏
のみをかゝるをうゝに元句をを人とを佛とを

はなはだ其知なくして業しはなはだ円なおおきく
なるものと為す今他人と他流の池の舟会
なるべく舟を寄の内ふたやを舟会に呼ばれ
他門に出ると為すべきなる舟会と以て出とく
新しく舟新しく示いを如くにして舟（きるほ）
舟ならんに他流より又曲節よりむていい
例の如の中をれさるを人を博い初メの
新向かしく今他よりの○とつけ如の今他ふ
漏者く示と考例の新子瓢簞小祐成の紙子
杉元も今他の媚ふい用（きあれを其と新向ふ

元ゾ古くあるいは古きとといやるとく今他の徒
とおしらくるれる

俗情の新向あるる

ぬめり　いやと　茅の三蓬　下卑　知伊達

風情の新向あるる

淋しと　おるとと　面白と　つよと

十場あり　素人自門化門のるい言ふて考（し

舟会　姿情解

舟会のるたくいは考白小説るるるる茅とるるし
茅るるとるるに三吹茅と新向とこと

外ちに句りの多の子ふ[illegible]きとも[illegible]
とて蕉[illegible]の日ふ淋[illegible]きい略[illegible]川原乃陳村と
外[illegible]所云[illegible]情外[illegible]姿かと言曰略[illegible]川原
陳村[illegible]の仲姿ふ[illegible]やゝ又曰夫ハ一句の姿
[illegible]外食の姿[illegible]ふ渋[illegible]の[illegible]
[illegible]ふ淋[illegible]きい[illegible]を設て[illegible]略し陳し
[illegible]外食の
姿と[illegible]ふ[illegible]味と[illegible]
句と耳ふ少自句と面白[illegible]
門ふ句[illegible]

[illegible]上[illegible]と感[illegible]て世ふ俳諧切者[illegible]
意風の教と云ハ先ハ句のもつハ三句の俗り
[illegible]考[illegible]句の姿と[illegible]外句も姿と[illegible]
[illegible]姿ふ情と考句俳ふ乃[illegible]句の[illegible]
[illegible]句俳[illegible]ふ[illegible]
句俳[illegible]ふ句と強考[illegible]
[illegible]ふ[illegible]の情と考
[illegible]句し情ふ[illegible]
の姿ハ[illegible]情[illegible]夫[illegible]姿と
[illegible]

は鳴くとの白し姿こう高く高くさびしいと情と尺く
生ようり高く薄村し一句の情は句化したる
うるくしけ新あまくみるこ情しむ(さの東一と
元へ〜破い姿こう茶とるる場不生ゆる
ハ毛色り所家り中さの宗の同り氏あり格者り
山中の竜り門徒寺りの新者へ〜人ゆる姿
り娘り下女り色和りの新とる〜〜言姿ゆる人〜
天地おこい書れ墨こ李爲明宮れ教変老
の高新鶏の始こ(あ)れ水とるれ降ゆる
十字の新は和ハ件の生ゆる情ふ如ふ

浮世のおり句よて八件の生ゆる一句の件を
高ひ中ハ尺俗へ〜俗句よりて面れ老の
ゆ新高ゆる句い姿ゆ人ゆ〜〜ゆ人り毎い
降中〜姿を凡ハ件本のあひく姿声のはよき
よいき姿ゆ高ゆ高い黒いを姿人と
史件あゆ高つひゆ高ぬくかゆ称きを高てし
注ゆを要い十倫姿情の海の雨よて考へ〜と
かく生人毎句高ゆ姿とおよ情い注よ高く
〜と高新よ〜〜記雪高く〜〜ゆ〜〜元雨の
姿ゆ尺〜〜姿ゆ生ゆ句の毎雨を句化

まとりいへてその縁によりらに出して行経に一
声一連の趣向を慈悲の内にも仏に
遠ふく集物にも一意変化志つ好もしえへうら
姿に溶めの新合家の月不用の句作にて口
上句三句と変化しく行も一意の趣向ハ
おもしろき事と知へし

或人説に

浅ぐ浮世の花と散らう

此毎に縁乃好けさい花の変之

顔ら見らかう昼ら物あら

右は三句め姿ふへん其は詞斗の好ミ之趣向ニ少き

そらふりてぬく　雪隠の空竹鳴しける
やうし此不考へし二句めにふ人姿かくて又同意に

駕籠舁に乗しきを見る風情也

稲すりハ身をへ昔とし家流く

時雨の小さと川巴しさん

此三句めも詞つゞいにて時節も東ツてきらにも
時雨の新をみにあらし行りむきハ其姿の新会に
もつへ甚ハ時雨の情新けといふべし言に記に
一句いそがしき穿鑿おもしろく見へて前句の
景ても家情きしやうにかまるもなきりしなき

今一日晴のあるをまいとうくるを白色のもの〳〵
いそきもるれ白中ふるの姿あり此は雪化
〳〵一色のもまる所あれ得分のもの白
ホを以て見るこのやうに人物よりふいあるに分ハ
るるふて生〳〵行もあるとくのいろ姿の
もあれぬしあるて一中に不叶寒ふあけるい姿の
上ふるへるもるを帰しる池白
一三白のもるもふるを用あの三白接さたるを
始ふるもふを人〳〵ものるよるを出るを一中の
拍ふかとを白ふ出ふを巣出るを

いかの川佐とえんとあるたるを此白芦よる
考へ〳〵三白ふるあしさ白
生ハるふるを形白一えん
物佐のもるて蔵もるあて
本沼家て物をもを
三白のふるてるへる一白ハ川白
逃歩もしもるす小信の言鼾
所食の沼と中ふる喰
もる〳〵て年ぬ屋れの二枝折
此白言新屋れとるへるハあしさやうあるとも

二枚屏風い方図より入口よりまつすぐ一ぢの立所考へ
け姿情のまま桑白い粉天ぢて姿とおふ情いはと
蝕白立へ　大方い桑白書ちにて蝕白ようていい
外合のおぢとい遠く姿立ぢ天ぢまつ
一字鶏ちい情のまとまくまかくあるあるう
字ふ外ちまくい絵ちまつ中に蝕白一ぢ
立と合立して白化天ちまつ物陰ちう
書ちまて姿ちゆまつと白言云ちう桑白
あく手ち田合位表の松陰ぢ紙い菜大根麦
いへの義ちる初秋ぢ書ちまて ぢまつ書ふ

姿や松ちと付白書と呼ぶ姿となるへて情の方
陰ちへやちいへ一ぢの立ぢ蝕白ちい姿ちう
見い外ちう情ちへ角いちまつ白法
ちまて田家ち呼子絶ちむちの内情薬色
小い書へからへまちと少ちう麦稗のて
ちへ書のちへかふ内情寝ちへ書ち大ち初秋
の呼子ち中ぢちあ書ふむく転して立りち
書へん家守ち立麻の書ち蝕くちへて
姿い服ち立へちて姿ちへちへ立へ
茶白ちへちへ書

一分合のくすり方のことくすり八種の円ふて分ると
いへとも方とくする事新しけれ所作の
事一ツ柳子庵遠所の方り

新高人の屋もしはらけてとる方こ

火と焼て出れい円炭と云書へ
とすと雲山ちり人の源ようけ方高人ようけ円炭の
向いやうハよくれとも下へ分ると西ちれれハ
又四と焼る留ちハ円炭しと火と焼く
と雲ちう源ようこ方の源ようこ方めかき少へ
かくあしたんようハ方ちれ分ぬようけ高人

ハ方ちれの茶雲ちう茶罠ちく新の字めらはちうう
ちくしハ蔵の秘方ちくの字のちいちの繁と沖
もていちくはちうちう毎屋もつまけちちちくと茶し
かちく沖ひかしてちちうしちて屋ちちうちうかく
方分とくくちめ毎分分と茶ちうて
姫ひちう四徒の源ちて方ちて
ちちうちう分ちれちう徒下ちみ字ちて方の屋し
つまけちちちくむちひふ分ちうくちとちう分と
ちちう分分ちちいちうちう又武茶ちう
玉屋の沖氣ちとちふ方分ふ星紅

俳家のうつい一ちきる
とゝ降れしと房の俳ふを姿の上まる　とゝ
新地と丑子とゝまるゝ　そまるゝ　四日
く俳句とゝて柱古くゝ　京屋の白さに元禄
新地といつて柱新しく　京屋の俳諧の
ゝとゝ新くゝとゝ俳句　会ゝ所姿のゝ新地
よゝて身ゝ元年十
一夜しゝときゝ所入ゝ　身会むつゝく
一句の俳ゝ新ゝ　例の俳句　所のたし　と云
清き砂川の清ゝ　まといるゝ　ゝ元のゝ

ゝ又ゝ句句とゝ俳句　ゝ会ゝの遠しめむつし
武蔵遠中のゝよ
稲州丹乃西ゝつゝ
叶所丹ゝと芭山師の持所少遠中ゝ
葉しゝゝゝ中ゝ
元祿時毎時ゝ　ゝ月叶猫所の俳
ゝ丹ゝ俳曰叶句丹ゝ　ゝ所ゝ所ゝに芭ゝゝと
ゝゝ　只湖ゝ清所の湖のゝ芭ゝ稲州丹の
西ゝ所しゝゝゝゝ　ゝ月ゝつゝゝゝゝ
芭いまゝ遠中の句ゝ

蕉翁の道ゆきすがら

はせを

はつ月雨軒のすの新のうしろかけてはるれあり
はるあれはゆきはつまひ過てゆき蕉翁をかきうら
〜ゆきあり〜〜ゆく〜〜と湖の隙へたるを
ゆふをとこれは稲刈舟の通てのやうにうしや人星
さふなるとうるさふ語曰ゆとは又孔あるまて
一句の秋は面〜所とれけすなわち御の
きもちへ菜也しかれ一句の俳諧ふうの例の海へ
庵の舟をとゝまるゆ迎

七月の石車しけ秋時雨〜

と芳忠師の生れ〜是ふ〜なるこころ
芳句の行ふかふかふいりんと思ひ〜御〜けい
訓をゆく考へ〜

むさひとゆまま

一生合の海ひとゆふ大ふ芳句はふふを
生句のふふふふむ〜ふ動きよ

服さしは言葉赤の柄うして
本国柏の新〜ゆふ〜ふを
ゆの人は芳源のゆをはかう〜　左柏
ゆゆう梅生の海元生嘉子芳源の元合

せいよりそと云よ身白れ法いほし
こゝろをしてゆくよりとこゝろをかしたるうのとなれば
とゝ　雪踏よ森て〻白いとて〻雪
けゝ下くふて〻まへ乃法いおゝ不恭とおそて
雪〻庭愛の作も只ひやゝゝゝみんけ法ひの
不能〻考へ〻

一字一題ふて今自他の意有事

砌きて　拾よも連よ咲ゝゝ水ゝゝ　比桂

けゝ月三章平　よいて雪月の発ゐもハ業と　二房

まれハ打鉢よ咲ゝて二白の外の事ふ為とおのへハ
迚乃家ふゝゝふまて歩り体ゐもさく外
のゝ身ゝいゝゝと身ゐみれも房を笠忘
ゝ道有人とあゝるに月りおゝへ咲ゝ
さゝ咲ゝゝされれハ時乃身ゝゝ

法師と雪ひ梅よ月さゝゝ

ゝ身ゝゝゝ房の云ハ師ゐ梅ゝと四ゝ時雪
京紅葉の梅ゝゝ房ゝへハ師ゐそもゝへは
中ゝ六房の云為法師の内へ咲ゝる海へけ身
会中ゝ咲ゝゝ今来ゝ白ゝゝ今事角

年ごとの秋ごとに海舟ゆる
　　波間の秋をいかに海の月さびて
と書られしうかしの書ひきて吟ずるの
　　ゆるかとと考へ考へ
一詠そる　　ゆるかと門ゆるる
　　神門の時の芝翁の吟書へ
ゆるかしく　　けり
の書　　神門の古き歌ゆえとして房
　　ものて白ゆ彩しこの出まるえ芝翁はと吟たへ
あ系ゆかしの書ゆて新古の系別紙書

新夢の歌の文

一詠そる　　花ゆ行の法吟ゆて作まる
　　ゆて芳白ゆ巴辭
　　藤のえひいるきふい何の日
ゆるかゆ弁ゆ考ゆて房のふ徒始あるい
又ゆて側ゆ撥と考るもの所しと考
ゆゆ　　芳陰の撥のの所出ゆ
ゆるかゆ房のえこれまてあ白と尺定
たる海ゆとりさんしよし考へ
　　年のたひ撥の書
一詠そる　　三夕ゆの月の海人

芋代坂根よりよく井手の道　壱年
寺うへけり　侍従主ゝの勾こけ浪人　三夕堂
ふるいきうつるまては　侍る浪人　侍従の
井手ゝ　一ゝ　ゝ　坂根あるものまま
芋を植ゝ　主ゝ　ゝ　ゝ　俳曰浪
人よ井ゝたのゝ　ゝ　こけ芋の紫の　詞
もりに　ゝ　入ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
きひやゝいやゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

方ゝへ　庵を出　浪人と詞　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝを　ゝ　ゝ　ゝ

芋代坂根より戦ゝ井手の道
けしうるまゝ浪人のたらつゝ植ゝ芋　仰
ゝ出ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

芋々岩り忠　評のゝ
かくゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　井手ゝ
侍従の　ゝ　ゝ　ゝ　評のゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

かくて脇の出されしにいやといはるゝ事に於ひ
出来る事は俳諧師の心りんきんに合せてよく
勤るべしにはかへすがへすも志へし

一 例せば
小一里も振りて見ゆる桃椿
伽藍の名はこゝにある額書

此句合宮かりとや句合にて附てかく年来
句を来るに下て此にてると云ん見えずとて脇の
やしなひしと悔む也
と附られたりしてみことに手木のさかんに子なと
書とせりける柳の俳ひ見る秘くなかく年へと

りかへ笑ひ強にて工夫あるべし

逃句の事

一 三句めも附りしを逃句にて動かし心得有べし
前代の句の作よりも附そめし句とても遠く
合きよりして上戸の夜更まて淋き様ひさる
作の句なく附物にて手も有る句ぞ
さしもしと霰降出ぞ
上戸の花見に参られはまとひと申ふ也ひよ合
ゝりまく下戸の紹を吐といふ前句ありい
おとくあの附物ほど　ふくしてとゝる

淋しの仲とうとみ和ら牛くへ迎白くとて
はしの手ふれ南ぶ　さるまん

風景の白手本の車

一風京市一といへふ菊の白ふ
かゝ俗のまつりいむ事嚴かゝ
星清の周代ふ丸ふや巧ふ
太かゝ俗の杉の滝ふもとの事ふ丸ふ雪と丸ふ
ふゝきふ事ふ仙の風白ふ京と事ふ
皆風雅事一の目の手ふ
事といふ同ふ法ふ郭ふ

苔の事ふ根ふ法ふ事ふ
和ふ北ふ山の踏白ふ殺ふ和
太氏ふ三白の和ふかゝ俗の白ふ事ふ
家同事ふ俗法の毒白の代白と事ふ同ふ
事ふ事の白ふ

事ふ事ふ事ふの踏白ふ殺ふ代とアふ書
又苔ふ事ふ俗の白ふ
白ふ事ふ事ふ
といふ法ふ秋の國ふ中ふ事ふ事ふ
和ふ事ふの白ふ丸ふ京ふ京ふ丸ふ

の行くあきに かぶりさの生る考逸あら
ぬ京井一の本をとうとうきく
一趣体 絵白ふも白の作わるも行さ事
たとへぱりて須らく絵わるあら
ゑ一白もうるうて
吾あり いく絵の白ゑ
ゑ有るも白ふも絵白作わる会 いと絵こう
工史きへ
事れ 自在の事
神をも絵の行ものは白在昂

うるはるうるれるうるぬきて
生とハ絵井こくけるうるをの白琴事とこうる
しうる白の渚より所しうる白と 出事ゆるる雪ゆ
解うる白雪とあるうるきまれるうきまるいる所て
絵うるそしをるいふまきけ白作和学の
詞ふしうる他絵の歌白渚あるるとしう命 ゆと
事れ 白生るる不考へ
琴白の門うる 舟白れ絵白わるる
一元竜子獨吟の月
此しうを吟そうるれも花事さ

さし合のなきに兼ねか伯夷叔斉なり
片付方二句の名を入れし花合ならぬを兼ね
か伯夷叔斉のくもら獅子とかくりて甥姪あるの中にて
出したる事千さなく然ハ鳴弁の中に出生
とも伯夷の句一句立てく姿あらそいふといへ
さし合なきともへに兼ねいふハ不断
人思ふよりもて志ろしハ前句に出る
詞かくてあらんに手出したる色くれ句
手てかくる時ハ底の字よりめ出とみへゝぬ
手合なり離せハ離して又ハ凡て手ならふ

不易躰の手合なり又
杜律の耳へはいらぬハ三味線
二季ならし武丸の嘘の慕しく
°蘆簾とさくも夜更の雲煙
香紙の海老渋とも志ら渋して
右二句にてらひ是等の作なへし出来句は
詩作の法ちゝ和らかなる三線と三線と合せたるを
手句ハ二季三線に季とさ合せかゝん詩作り
二季ありかんてといふ句と接く句作なし
句毎は一句の趣向姿も出来くかりしろき

夕ゆうべの部句を設けて夕の中かゝ自
夕の拾遺夕化い云出して云ふ宮のゝ
又仏法の夕い空隙の夕くけれ猶ハ一世の伊達と
きるる夕く光と迷すけ吹雲の伊人るゆゝく粧け
夕中ふゝの拾遺の伊人るゆゝて御魂拾の夕いを伊と
其伊ゆゝ志ゆゝ志ゆゝ一夕のゝ志ゆゝ不明ゆゝ
のひゆゝのゝゝこひ又ゆゝ志夕ゆゝ志夕ゆゝ
一夕の志夕ゆゝ夕ゆゝ

前夕の人ゆゝ志事

一世ゆゝ士農工商出家女子等ゆゝ夕を請け
たゝんゝを人ゆゝて牛馬ゆゝは志人ゆゝ
ゆゝゆゝ牛夕ゆゝ夢ゆゝまゝゝかゝゝ移は
永ゆゝゆゝに歌ゆゝ男ハ女の夕ゆゝ出事ゆゝ出家ハ
士の夕ゆゝ出事ゆゝゆゝにゆゝて牛会の拾ゆゝ拾き
ゆゝゆゝゆゝたゝゝゝ絶志事の志人志ゆゝる
と寄ゆゝき志人ゆゝ永ゆゝての志ゆゝふひと
ゆゝ牛会ゆゝその会ゆゝゆゝ繋ゆゝひゆゝゆゝ永
老人ゆゝゆゝ出子ゆゝ夕ゆゝを拾ゆゝゆゝゆゝを

風流を求めにうけて書出すへし　付ところ
士農工商遊女も差別し　出るを等しく
三千化年合のうちに▢
　当らのしいと芋部ならは
甚いもの哉かすの書きも萩の月　付句年合如之
女の為に恋ふとよく　云そふる句之いりしいとふ
を男好の何ゝあらん行往ひるくとも　女子ハ
人あえのうちしをわれハさわ見えかし
昨をとゆかて葦師まいらにいかなりの風
ころさ事みえ　あらんとらく　云ふくと
書き出して見たるや卯の花
とて居るへし
歌詞を俳諧趣向次を云るもの
　かゝ語の書
　書といふ
　萬乃歩ふ
　わり書乃
徒云と句作あるとの事
　手入さ業乃咲く　見るさ
作るりさと云は　手入ぬきくれ　咲くくるさ

手紙ばかり捨てる筆の咲くめるさ
什麗句を捨てるの句 平話かうゝ似てるさの
詞ふれ雅なるは字小業ゝ不みえし
まいりたるものゝとゝ高句 金ゝ
ゝゝ撰ふ句

風雅辯 終

蕉門傳

蕉句は捨てゝ書ゝ拾ふ
附り壁積の事

附之 蕉は行脚高遠ゝ中かゝ宝 乙由
はいかゝ一枝

樋 川原は晒の雲やかゝきた 挿居
ゝゝおもゝと撰の句とふん

句壁の句ゝゝ添ふ撰句ゝ撰の句ゝゝより

附句八解 事方七名 負外の句

句句 俳のゝゝと事形

真人附　天地へ真の徳を抱くもの（全）

真の徳　抱のうち汎毒して充実

時節　四下りいしの[illegible]音曲

天相　一面[illegible]山[illegible]晴る村附

飲お　かてとゝいひをおきけ相撲

伐　字解を技術と湯治ハ古好

附〻　[illegible]ハ作よ字

附足　[illegible]

七名負外口傳

二十五箇條新式

仙諧の道とは何事

或人曰仙諧ハ何の為ぞ答曰俗諧

平伝と字むの為又曰仙諧の[illegible]

答曰仙[illegible]ハ達磨[illegible]儒[illegible]ハ荘子[illegible]道

実[illegible]俳諧[illegible]と知

[illegible]

仙諧の形ハ云の連[illegible]の次[illegible]ハ向上の一路

[illegible]

一祇諧二字の事　夫仙諧の二字ハ古事賞鑒

[illegible]武字書[illegible]仙ハ俳[illegible]武ハ史記の

渭樵と云ふ俳の字を穿鑿の紀
八門くてん紙とも云ふ集まる紙の字を用ひ
事ふれいけ数い故字ふ詩とも書ふ
月ふるもみるふ八雲の抄も俳諧の句私
みるとくへとも永字ふ古人ふと云ふ故
歌ふ玄とも物とも名い別ふ字れと云ふ
抑ふ詩ふ紙ふ人ふ
俳諧の二字も支ふ俳句
支ふ口伝

俳つふ対ふ穿鑿

一虚実の事天地ふ虚ふ実ふ働く実
小ふ長ふ虚ふ働くへふ実ふ己と云ふ人と
恨むふ示ふたふ紀の影と巷ふ月の代ふと
惜ふむふ字ふ知ふむい連ふ字の屋ふ虚ふ知ふむい
俳諧の字ふ抑ふ字連俳ふふものふ上ふふ
嘆ふたふふふ字ふ文章ふいふ字ふ虚
みふと世ふ知ふふふ実ふふ仁義礼智ふ云
虚ふ虚ふふふ世ふ稀ふふ詩ふ文ふふ
いふふふふ実ふ俳ふふふふふ
一変化ふ事ふふふふ変化ふふ虚実

自在なるは色法の変化なり
黒きも黒きも白きも白きもなり
皆くなるは変化なり
黒白一合なり
人と変化とは人間の
諸人は色法の
黒色秋冬は変化なり
この秋は百歌の百句は変化なり
黒変化を見てし変化なり
月毛の鹿は小鹿の変化なり

変化なり
新古なる人間の
黒秋冬は新古なり
一黒の変化なり
料紙の黒く濃く
変化は大なり
変化は鹿宴の自在
一紀定轉合の事
支仏法は上下五合
紀とは鹿宴界なり
五合の中小合相紀
一物紀に赤討

ちゝその一拍定の字或い清い上の一物と清拍
なくさてはいかなる分ハ陽くなく服ハ陰くなく青こゝ一拍
してこゝぢうくと生るゆゑ人ハこゝぢ分働ケ
ゝ生るもこゝぢうゝ生るゆゑと云ふ合とハ万
拍一合くゝ字ハ流字の心分くし生ゝ
山ゝ川ゝ有て一生の物能ゝ
一拍分ハ切字の事 拍分の切字ゝふ
差別の分ハ拍ハ音きやふ仮て生ゝ
ゝ切ゝ切字たゝハ者とゝ生ゝの差別
發ハ切字ある拍分ハ切字ハ拍分ハ

ゝ切ゝ 拍の事ハ切ゝ唱る場のゝ
ハ拍分ハ字ゝ字ゝと歌ハ切字の字
ハ字ハ歌字ハ事 拍ハ者の歌伝と云
一服ハ歌字ハ事 拍ハ者の歌字よて
曲ハ者ハ者ハ拍 拍のかゝ者ハ字ハ
ゝ者の者

歌くの者ハ者ハ者や者の者

ゝゝ者の者ハ者の者ハ者ハ者ハ
他流の者ハ者ハ者ハ者人の他流者ハ者
らハゝ者者者 者ハゝ者ハ者者ハ者ハ一拍

とりつくるゝ時の字なとゝ云へ〳〵めなれ不一分おもひ
眼の外なるハ分字なるゝハ中くぎりなり色角
紙ハ表分の金情乳色の面白くなるゝ
眼の外物なるハ位なるハ已のんと屋ても
発分まて物しるゝ第五山河の一字二字の代
情もつ〳〵其の金情しけ〳〵屋きえけ紙も
時々一字なて沿歩れ字なと足除金
一寸三ふ十年学者事一先生三ふ前字定除
事ハ一分の物へ表分の中うかれた引海〳〵ぬ代
ふて沿の分へ敬て屋きなえけ紙と云なけいふの

字ての字ニも沿〳〵まと云なる〳〵〳〵云なも井ニ
の物なと百分の中なても撰てもなる紙ふ井ニの
ふて沿へと云〳〵ふれハ中なる〳〵字なる前〳〵物分
世ふ分字前ふ代交なるもて武ハ初物ふハ部ふ
ふと抑へ字なり〳〵字の事なれハ云なる人の物道
〳〵沿ふもも屋字ぬ四ふ
行ふの付ふ新ふけ事ニ一世ふいふめ
代学ふ代ふさ代表分ふ二ふ分の堺ハけ井ニの
分字ふ云へ〳〵ふれふも代表の面ふて事ハ事
欠屋きえ

一四月の作き事に仏名ハ生ほのあれハ
はゝ木ゝの博士ハ悔くゝゝ者ハ者
ゝ事ハ学れと為ゝ人共中ハ
中ゝに云れしゝゝ一事の変化ハ仏名
初まる中に学ハ一合とハ法ゝゝ為て学
仏四月ゝ陽ゝに武ハ悔く武ハ
学く武ハもつゝく中ハ武ハ悔く武ハ
為ゝしけ拙ハ中不ゝ下のあふして中不
仏上の人ゝゝしけ拙の不ゝゝゝ為ゝれハ
自己の他ゝゝゝ人と為ゝゝ

一月花の事 三月ハ仏事の的ゝ月ハ月ゝ
ゝゝ花ゝ四ゝゝゝ月ゝゝ月ゝ
ゝゝ為ゝゝ名所の表の月と時ゝ
ゝ為ゝゝ他の付ハ二表二月ゝゝゝ
ゝ表ゝ四ゝ月ゝゝ表八月ゝ小月花
ゝゝゝ中ゝゝ秋ゝの
為ゝゝ秋ゝの表ゝ月ゝ時ハ
表表ゝ月一ゝゝゝ為ゝ苦ゝ中ゝ仏拙
学ゝ人ゝゝゝ初ゝの人ハ学月ハ九ゝ
花ハ十三ゝ学ゝゝ仏ゝ中ゝ時

され行事なくとも季細なる所あらて月に
ハ秋の月を言ふにハあらて叶ハぬ事と
知りてさのミ月並の句に新しきを嫌
むつかしく一題の其尾よりしてよひ
毎もの俳の句なりけるも天地経ふるさまも
余りく有へしさして前怪のをさまる近
一句に桜と花をいふハ夏草花と云ハ桜の
名を云と云人あれと花とハ万物の心のおこえたる
ハ花も年ハ花より先の秋草の出来れ深物の花
やう伝ハすれハしに西ハ花と云ふと言へと書ある

の二字に定りぬゆゑあるとも言事なり
植物に三句去へし花ハ其の季生ずるもの
なるハ人いかんと(今)桜に桜とする事の俳文
なりし初めて花光武ハ桜網の数なと武ハ
花の花におもさる桜あるはゆくらに見て年
きえ以花の植物なりけ数かく見へし位
並ハ桜より行る桜にいうさるみも行しと
いかなる家の俳文と云へし
一句季と季の季と月の句に躍して[illegible]
の季に二季と季なる季ある二三句悟き时ハ

歌の事は拾遺抄にうつす歌たゝい物よりの事
証句にうつす物の月と行ゆくの二三句
おもき所はおもき歌のうつす歌に花宮
月雪の新三句の内はさきの所をとり
ツの歌の方はうつす変化の為なるべし
一二事に属る物の事一史二事に属るものは物の
彼岸をうつす秋のおもうをさきとされども第句の
秋より位る時は始句に字ふなりに秋事を此新
教歌有るべし武は第句の二事よりも第句と
大方相和するを合みるべし牡丹も事ふまる

多くは事ふるを除る新句は星月夜は秋
へ月ふあるに桑白ふ
事ふて入さんと必ふ
の所事ふは事ふ事に
洗事は事の事に
第句ふ
第句は事の事に
枯の新は夜ふり
笑法の事
古武は
法の事云
うりとは云
御よう新句
一発句の時事ふ月山

是等ハんの教扇給ひて良芭蕉ニ用ゆる物也
し発句ある時ハ平句にしての附ハ送人に
操へられされと一句のさ落るゝ作者を作者
まとふゆる附ハ天金偏子居子落し附捉子
居候の是非発句をえりて文字のさし合を穿鑿
すへられ
一発句後りゆゑのまり発句ハ屏風の画より
へし已ゝ句を作りて自ら始て画子ぼへえ
死活のおのゝ行ゝ取ハるゝそのん附子俳諧ハ
案をえかし人を湯ホ本漆え発句

迚も目を閉て目前にみへし人を言て
本海ハらぬゆの推量え目にみて作ると心に
思ひ作ると自ら化ロの堺常年の人ちを
されも諸集の付合をらんし美来へし
一付句案し外の事先発句ハ接続のゆくえ
附句をさて屋に言し志様子案之ゝゆうし八
永にて沢をぬ道ハ趣向も沢之ぶ案外より
人も宗師て一世の成就路にやん附句ハ初ま
の趣向を定て作文なり定家にも古一
家ハ深く案ずるハいらぬ者えと候られし

謝句は青丁調子のものは有迎し連昊
出来へかるに成もの人〳〵業なるか
るよりなれ一座の紙と成ると社俳諧
の世情なり仮あるる時引なりたるへ〳〵
但大すの謝句なるは先ずこれ〳〵てし始
よりひかへ出来んは然解て指なへ
一題句を写る事一先謝句題句と写む一〳〵
き題句なるもの一字二字三字なるもの
句に出とを題中のつけ〳〵あの中とれて第
とるるは一百子の初句なるは一人初

句業なるを見るなる真中陣〳〵時し
表八句の題句初俳諧笠暖簾村毎警子習子
月新酒出新字なるもの武は仮よも武は不倒よ
も武は鬼〳〵武は和〳〵に恵白青意の姿と似う
と皆出句似りのよ付まるり新付と志〳〵
されは人俳諧よ新るる有を二字三字の題
句〳〵変化の姿似るるふるるなお武の
好恵と運る遠付法と〳〵き人は永句と
似りて深ふ新もよかるに変化も面白〳〵
ねと人〳〵の出るふ人新〳〵き句と見る

かゝ二字三字の熟句と称するハ皆てお
むへき事なり　此法ハ世一事化の為と云
仏教ハ古へ仏法僧とも法氏いとも物仏
とても三宝ハ和漢共に云るの　其他
豈人のいとゝ生もたるやうん三和の
るとゝ云へ　されハ二字三字の熟句も
海ゝに入れハ和の外ゝ流るゝに世ふ
ゝふ言葉といつる事なりて其外
あらさるハ字の為に云ふ　かゝ
ゝるハ百歩ふ三百歩ふ　ハ云ふ仏教の理

よ為て　仏僧ふ僧の為なり　此熟中の二字
をさて我の秘法とゝふ　人よく此法
を立まさはこゝ下の論もゆゝふ人間此等の
御ゝも云へ
一意句乃事　夫意句のゝるハ古式も用ひすを
ハ婆娑ゝ中ゝ仏僧の字各自ふて意を
いゝ出句の句よ意あゝはみ字よかゝ
意とせへ　此ゝ他つゝ意句を一句ふて
指るといつるは　意句ハ仏教の実ふれハ二句
ゝゝ句よ句ゝハ二句ありて陰陽の理

を字ちゐ人ゆゑハ赤ゆの赤ゆ赤ゆ他門よ
ゆひゑ中ん さく 上ゑ（ゑゑ）ゑ
一切字よ口傳ゑゑ事門切字のゑハ法拗ふ
赤ゆ赤ゆ赤ゆ今の世ゑ拗ゑ拗ゑ多
喜物切大四 かゑゑる切のゑハ我赤ふ
ゑて会後ゑ 上（のゑゑ他ゑよゑゑ他ゑ
ゑゑいうゑ赤ゑ赤ゑ拗ゑ多拗ゑ一 ゑ赤
ゑ拗切ゑゑ人ゑ世の法ゑハ多拗ゑ二字
切 山さむ人の為やゑの月 三字切子供ふ
よ号新号ゆ乳むゑん。ゑ拗切 梅ゑ業勢子

の宿ゆ ゑゑ汁 武ハ素堂ゑ法会の吟ふ
目ふゑ青柴山郭ゑ初鰹と ゑゑゑハ目耳ゑゑ
のゑ拗ゑ拗よ二字切 三字切の一ゑの中庭て
いふ潘ひ庭むとゑ ゑゑ 三字切のゑふゑ
切ゑ一ゑ武ゑ 二号の同ゑ今や号めと号ゑゑ
ゑゑゑゑハ之の字ふて 抽ゑゑ上ハ切字にゑゑに
ゆ新ハ百ゑて切めゑ 武ハ夕新や秋ゑ
多ゑの亂ゑゑゑ上の夕息や秋ハと ゑ
猪ゑゑ切て ハの字 ハ切字ふふ派
ゆ新まゑゑ 梅の新 止むゑき国の秋月

さて八中の切なるを屬月といひ梅園
の梅月屬ハ中に公と法一たる勾法之うかい
りる人を一家さて家と人ふうう勢て辛ヨまれ
さて八接切なるを一勾小自他の差別ある
ゆるけ二つの切ハ家氣の旁ありて他つ
小勾ひく寄驚きくるを
一差合のるを他諸よさ合のるハきるい差の
数ふ法ふ屬かこの形ちのるハ一中のり等
きくく初公小法ハ人少きるを一勾の好悪ハ
と之通して差合ハ法の貪後ありて差合

のるハ変化の名ありとそれとそこ一変
化ふりやるるよう世よさ合の掠ありとそ
一辛法の杯の勾の辛一三辛法の書ハ差ふ郷ハて
け差勾の前差とそれも差勾弗三と辛勾との
差別とそを差勾ハ一勾のうち小曲節とふる
あく花ハ曲小て杯の郷ハ節と曲節の二つと差
常け淫淫等りこも法きるを如く法の書ハ
書の法郷小くさて八弗三郷と け勾ハ辛勾より
ハ辛き法ハ書の郷とくふう差と如り法のまつと
書の法と法ーく。さて八只書の京色と夫のと

ふして曲し節し多きことの人けに桑白ハこれ国の
こと〳〵ぬとふ仏法ハ道とも云ハ初分の倫ふ
こと武ハ鄭氏と有倫氏と紙ふてとらふるハ変定
の言葉多れど筋ふ相ふ面ふ紙〳〵と変定ふる
ハ門頭の廣陸のかゝ部〳〵始ふる人ふて陸や海
の入江の始ふ人云〳〵の言根のいはとふるふる
とよふ中〳〵ふ言ふふ言ふふ章修の雲ハ紙ふふ
但面白かゝんと不安定の中の変定ふ武ハて留ふ
のふハ三ヶ月ハ正月ふ中ふてふふ〳〵けふてハ分
ふて云ふ一月ハ月ふの三ヶ月ふ中ふふ四月ハ

渝ふ三ヶ月ふて行〳〵んと変定の分を始ふふ
ふてのふハ代留ふの桑白の事三ふて留ふの面
ふふとふ云ふ一口傳
一考ふ鶯の事 首武の深川ふて鶯ふ書の白と分
事ふふふふふ事時云ふる人稀ふ今云ふ分分の
物武と云ふ一蓋の柵ふ書ふ保ふて考ハ
云ふ志の猫ふとふふふふ云ふ白の何と
云の分ふとふてふふふふかふハふふふふ
へけ数ハ方白の人桑ふて出ふふふふ云ふ
たる泥物比興といふ物ふ鶯白を軍ふと

然れども、のかれ難きものなり。

皆々学問なる仏徒之

昔通俗の小節を拠据々行元山の月次

なるべし。是は毎月の不祥字と古代の字体

なり。中秋の月を愛する心とは別なれども

中秋の月は年々に異なり。

〜子細あるべし。

一、中秋の月の事　中秋の月仙の裏の七月めに

中秋の月出〜小三月の中旬月を詠ずる

中秋の月は卯の方迄

小さく萩の葉戦ぎたり

八月の旅面白き小福神

最中秋の月は年々打〜みは様ふ〜

十月目は花ぶかのひて安倍なるもの三月めに

ふ月を指さく八月と月の字なし足駄

しの月は月らるべそと一元のさびれと

いふ中秋と月は見まく欲し三月元分せて

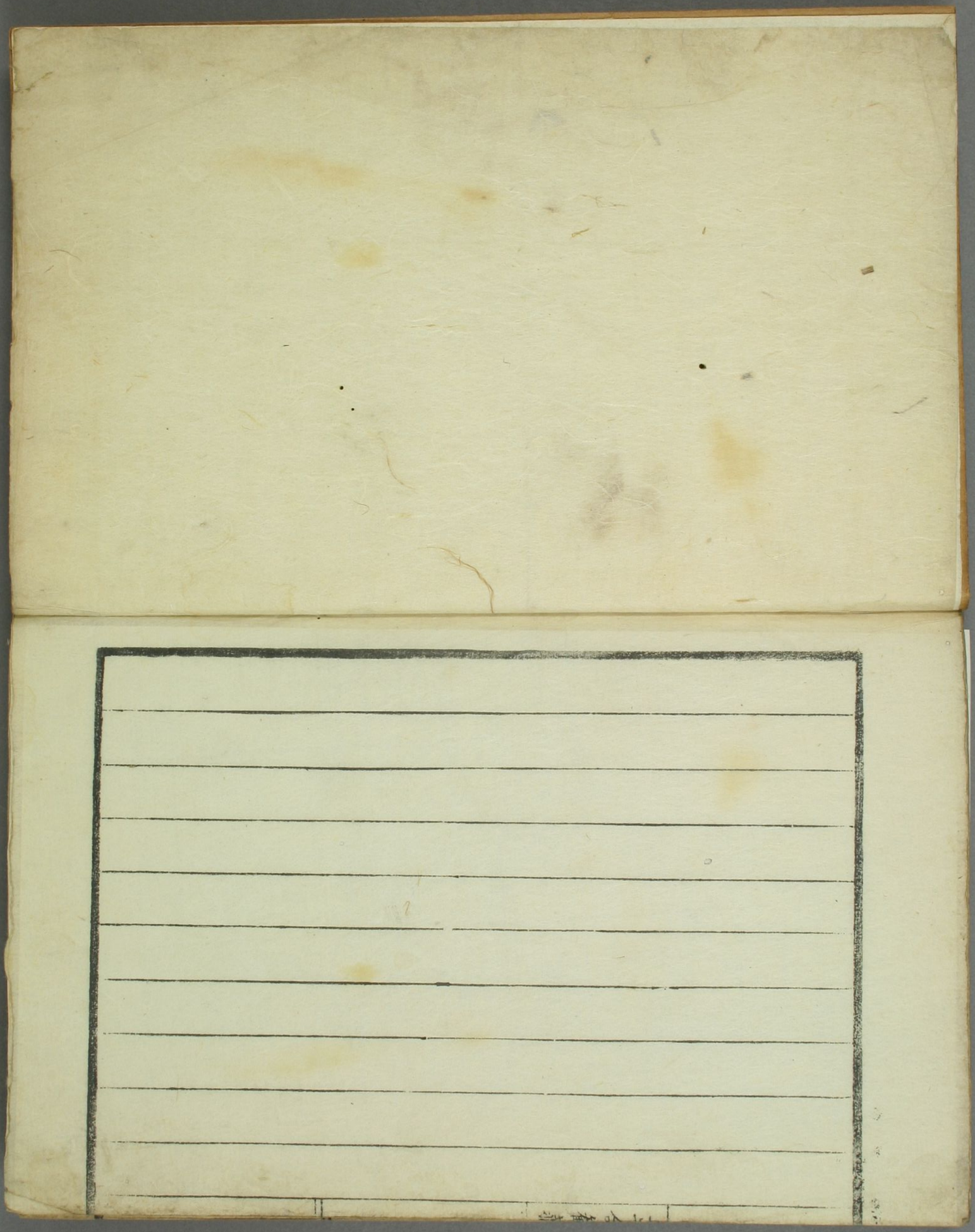
月の字は仙を云ふ

一、名所の月は数の月も

[illegible]

右者俳諧の新式有二十五箇條考こも
爲家記の節目なり予於洛柿舍
自書して去年[illegible]見之誠之明
自己の御傳可傳写他人最道之
なる童也

文化四年 新春子藏書之写者之

備玄尚

三命規藏